

ナミブ砂漠のナラ (!Nara, *Acanthosicyos horridus*)

をめぐる自然環境と採集活動の変化に関する研究

平成 24 年入学

派遣先国：ナミビア共和国

飛山 翔子

キーワード：ナラ採集，洪水，自然環境変化，社会変容

対象とする問題の概要

ナミビアのナミブ砂漠では、季節河川・クイセブ川に沿ってトップナールとよばれる民族が生活している。この地域では、ナラ (!Nara, *Acanthosicyos horridus*) というウリ科草本が生育しており、トップナールの人々はナラの実を採集し、食用にしたり、種子を売却することで現金収入を得て、長い間生活を営んできた。しかし近年では彼らのナラの採集場所や方法、目的が自然・社会的要因により変化している。

ナミブ砂漠では近年雨の降り方が変化してきており、短期間に集中して大量の雨が降る傾向にある。2011年には観測史上最多の降水量が記録され、クイセブ川での洪水発生も例年30日間前後であるのが、2011年は185日間にも上り、住民生活に大きな影響を及ぼした。

研究目的

調査者はトップナールのナラ採集に同行し、クイセブ川の現流域と旧流域で全く異なる景観を目の当たりにした。1962年の洪水防止堤防建設によりクイセブ川の流路が変更され、それによって現流域と洪水が来ることのない旧流域に区分された。それぞれの地域で洪水の影響が異なるため、各環境に応じた植生や地形が成立することになる。

本研究の目的は、まず環境の異なる2つのナラ採集場所の植生を明らかにすること、次に両サイトの環境の違いが採集活動にどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。



また、洪水はナラの古い個体を流し、植生を更新させる働きがあると言われている。2011年の洪水はナラの生育・採集活動にどのように作用したのかを現在のナラの生育状況から考察し、さらに住民生活に与えた正負の影響について報告する。

フィールドワークから得られた知見について

現地調査は聞き取り調査、植生調査（ライントランセクト上の植生調査、ナラの個体調査）を実施した。また、カウンターパートである Gobabeb Research and Training Centre から文献・データの提供を受けた。

聞き取り調査から、ナラの採集の方法や期間、利用が変化していることがわかった。ナラは食用としてよりも、現金収入源としての価値が高くなっている傾向にあった。また洪水防止堤防の建設により旧支流地域での採集量が低下し、採集の権利に関するルールが若い採集者を中心に守られなくなっている。その結果、現在ではナラは完全にフリーアクセスの状態となり、他民族の採集活動への参入も始まっていた。トップナールの採集者と他民族との間でトラブルも生じており、それが新たな問題となっている。



植生環境については現支流域・旧支流域でそれぞれ約800mのライントランセクトをとって調査した。現支流域では比較的植生が豊かであり、実生を含め生育年数の浅いナラが観察されたり、他種においても新鮮な発芽が多く見られたりしたことから、2011年の洪水によって植生が更新されたことがわかった。旧支流域ではナラ以外の植生はほとんど見られず、わずかに生育するナラの年数も古かった。

洪水が及ぼす影響に関しては、家畜や菜園が流されたなどの被害が確認された。ナラ採集に関しても、河床の植生が流され、ナラ採集に必要なロバの飼料が不足したり、ナラ自体が流されて採集できるブッシュの数が激減したりといったマイナスの影響が見られた。一方で、2013年の採集シーズンは「採集量がとても多く、良かった」と話す採集者が多く、今回の洪水とナラ採集の複雑な関係を明らかにするためには、より深いデータ分析と考察が必要であると考えられる。

今後の展開・反省点

今後は、クイセブ川の源流にあたる首都の降水量、Gobabebの降水量、霧の発生量、洪水発生時の水位、地下水位のデータ等を組み合わせて分析し、洪水とナラの関係性を考察する。

反省点として、採集活動に関するデータを広く収集することができなかったことが挙げられる。今回は基本的に1人の採集者について調査していたが、採集場所や時期・期間の選択は、年代や居住場所、生活のナラ採集への依存度によってかなり異なる様子であったので、より広い範囲で聞き取りを行うべきであった。また、「ナラ採集」に焦点を絞りすぎたために、世帯の金の出入りやコミュニティ内の変化、村と都市との関わりあいなど、地域を理解するための情報が欠落しており、社会の大きな変化・流れを十分につかめていないと自分でも感じている。この点は今後の課題とし、ナラをきっかけとして地域全体の動態を捉えるような研究にしたい。